

目的 和服の身幅、ゆき再についてはこれまで多くの研究があるが、そでつけ寸法については研究も少なく、従来からの標準寸法を用いる場合が多い。そこで適当なそでつけ寸法を得る為の基礎的研究として、そでつけ寸法が体格や動作とどのような関係にあるか検討を試みた。

方法 19~22才までの女子大生、身長151±2cmで肥満、普通、やせ型の各3名づつ計9名を被験者とした。実験着はゆかた地を用い、被験者の平均値から割出した寸法で作成した。着つけは同一人が行い、帯圧、帯の位置を一定にし、立位正常姿勢で脇身八つ口線と帯上縁との交点に糸じりしをした。そでつけ寸法は19・21・23・25cmの4段階にし、動作による変化をみた。動作は(イ)右上肢側上挙、(ロ)右上肢前上挙を各90・135・180度の3動作とし、帯上縁から糸じりし間のフリ上り量を測定し、検討した。

結果 正常姿勢において標準のそでつけ寸法は、やせ型の場合はやや長く、肥満型にはやや短かく思われる。そでつけ寸法と動作による関係では、フリ上りなしの上挙限界角度は、肥満型の場合にそでつけ寸法が大になるに従い、上挙可能角度が小となる。やせ型の場合にそでつけ寸法25cmの場合も、最小19cmと同角度まで上挙することができた。これは肩から上腕部にかけてのゆとりがあるかと考えられる。動作ではやせ型のフリ上りが少なく、肥満型のフリ上りが大であり、着くすむ状態となる。これは胸囲、下部胸囲、腕付根前後径の数値が影響しているものと考えられる。以上の実験結果から、そでつけ寸法はやせ型、肥満型など体格によって考慮する必要があると考えられる。